

主の降誕（日中のミサ）

第一朗読 イザヤ 52・7-10
第二朗読 ヘブライ 1・1-6
福音朗読 ヨハネ 1・1-18

2025.12.25 11:00 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

皆さん、主の御降誕おめでとうございます。

毎年わたしたちはクリスマスのお祝いをしますけれども、クリスマスという機会は、今日のみことばでは「神様のみことばが人となられた」、昨日の夜の典礼では、「その人となられたなり方は、馬小屋の中で寝ている ^{おさなご}幼子としての姿をお示しになったんだ」、そういうことを思い起こしましたけれども、この機会は、毎年、キリスト教的な教義を思い起こすと同時に、やっぱり一人ひとりが、何十歳になっても神の子どもとして、いろいろな忘れていたものを思い起こすって言いましょうか、歪みを正し、そして誰でもが持っているはずの素直さや優しさを自分の中にもう一度見出す、そういう機会として招かれているとも言っていいんじゃないかなと思います。神様が人となられたことで、わたしたちがもう一度人間としての素晴らしい姿を取り戻していく、ということです。

レオ 14 世教皇様は、バチカンで行われましたクリスマスの夜の深夜のごミサのお説教の中で、この人間性を取り戻すということについて、聖アウグスティヌスの言葉を引用しておっしゃってくださいました。聖アウグスティヌスの言葉は、「人間の傲慢があなたを押しつぶしたので、神の謙遜だけがあなたを高めることができた」という。そのことをさらに、現代的な文脈の中で、教皇様は「まことに、ゆがんだ経済が人間を商品のように扱わせるとき、神はわたしたちと同じような者となり、すべての人格の無限の尊厳を現します。人間が隣人を支配するために神になろうと望むとき、神はわたしたちをすべての奴隸状態から解放するために、人となることを望まれます」というふうにおっしゃってるわけです。

他の人を支配したい、また他の人を単なる統計上の数字とか、あるいは自分自身をも売り込むっていう、そういうお金と交換できる物としてしまう、そういう傾きからわたしたちを解放するために、神様ご自身が幼子となられた、その心に立ち帰りましょう。そのように呼びかけられているんだと思います。

わたしたちの東京教区の大司教様、菊地枢機卿様は、クリスマスのビデオメッセージの中でこう問いかけています。今年一年間、去年のクリスマスから、希望をテーマとした聖なる年を過ごしてきたわけですけども、「この一年、わたしたちは希望をもたらす者であったでしょうか。それとも、闇を深める者だったでしょうか」。もし振り返ってみて、むしろ闇を深める者の方だったかもしれないなあと思うならば、やっぱり今こそ、その希望を自分の中に取り戻すときなんです。枢機卿様は、「希望は物ではありませんから、どこからか持ってくることはできません。希望はわたしたちの心から生み出され、出会う人の心へと伝わります。わたしたちの希望の源は幼子として誕生された神、主イエスです」とおっしゃるわけです。

イエス様を一人ひとりの心の中に改めてお迎えすることを通して、わたしたちが「人間らしい」——と言うとちょっと難しいんですけど——たとえば教皇様がおっしゃるように、自分や他の人をお金と交換できる単なる数字や物のように扱うことをやめ、また他の人をコントロールしなければならないっていう、自分の思い通りに周りが動くべきだ、あるいは周りを動かさなければならない、あるいは動かしたい、そういう欲望から解放されて、まさに思いやりと優しさを持って一人ひとりを、また自分自身を、受け取る、そういう心をまさにイエス様ご自身からいただく、その希望を新たにしながら、その望みを持って、このごミサを通してお互いのためまた世界の闇が少しでも打ち払われるよう、神様の導きを願い合いたいと思います。

参照：

2025年12月24日、教皇レオ十四世、主の降誕夜半のミサ説教
<https://www.cbcj.catholic.jp/2025/12/26/35990/>

2025 年 降誕祭 菊地功枢機卿メッセージ
<https://www.youtube.com/watch?v=xeG8AYO8Dp4>

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>
携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>